『松浦宮物語』と「鶯鶯伝」

久保田　孝夫

一

『松浦宮物語』が藤原定家の作であるとされることは、『無名草子』に依拠しつつほぼ定説化されているといってよいであろう。

源氏物語以降の物語は、そのほとんどが源氏物語の影響を脱しきれずに成り立っていたのに対し、中国趣味を盛り込んだ『浜松中納言物語』ならびにこの『松浦宮物語』は、趣を異にする企図にもとづいた物語である。また、特に『松浦宮物語』はその範を万葉集や宇津保物語に求めている点で、その当時の物語とは一線を画していた。[1] このことを触れる『無名草子』を引いてみよう。

また、「むげにこの頃出で来たるものあまた見えしこそ、なかなか古きものよりは、言葉遣ひ・有様などいみじげなるも侍るめれど、なほ、『寝覚』『狭衣』『浜松』ばかりなるこそ、え見侍らね。

また、隆信の作りたるとて、『うきなみ』とかやこそ、殊のほかに心に入れて作りけるほど見えて、あはれに侍れど、そも、などか言葉遣ひなど手づつげにて、いと心行きておぼえ侍らず。

また、定家の少将の作りたるとてあまた侍るめるは、ましてただ気色ばかりにて、むげにまことなきものどもに侍るなるべし。『松浦の宮』とかやこそ、ひとへに『万葉集』の風情にて、『宇津保』など見る心地して、愚かなる心も及ばぬさまに侍るめれ。[2]

ここで、「定家の少将の作りたるとてあまた侍るめるは」とあることにより、『松浦宮物語』をはじめとする定家作の多くの物語類を指した評言でもあるとみなされてきた。しかし、『明月記』を始め、定家の『拾遺百番歌合』『物語二百番歌合』等にもその自作の物語からの歌を取り込んでいないことは、どうにも不思議である。

また、松浦宮物語絵が作製されていた折りにも定家自身『明月記』などでも、何も触れることなく[3]あるのはいかがなものであろうか。

萩谷氏はこの『松浦宮物語』は実験小説であり、定家の習作に過ぎなかったとされ[4]、また、菊池仁氏は定家は散文に決別し、古典再生のねらいは和歌によってしか達成できないことを悟ったといわれている[5]。ただ、これらの解釈は『松浦宮物語』側からの分析によるものであって、『無名草子』が定家の作による物語は「あまた」ある、としていることの説明には直接結びつかない。

豊島秀範氏は、『無名草子』にある『松浦宮物語』評言の「定家の少将の作りたるとてあまた侍るめるは、ましてただ気色ばかりにて、むげにまことなきものどもに侍るなるべし。」の部分について、「気色ばかり」と「まことなきもの」の二個所にわたって用語的検証を試みられ、この部分の解釈を「定家少将の作といって、作品が多数あるようですが、それは言うまでもなくほんのわずかで、一向に、（定家が作ったという作品は）実際には（多くは）そんざいしないのです。（唯一彼の作である）松浦宮は……」の意であると提案している[6]。この解釈は、「あまた侍るめる」といわれる定家作の物語が見い出せないことと考え併せて、『無名草子』の新たな読み解きとして承認されてよいであろう。

すなわち、豊島氏がいうように、定家の作による物語はたくさんあったわけではないという理解があってこそ、習作としての『松浦宮物語』を残して物語の世界には決別し、和歌の世界に邁進することになった定家の姿が、『無名草子』との間で一つの像となって結び合わせることができるからである。本稿でも、今は『松浦宮物語』を定家の作と認めたところから論を進めていくことにする。

この『無名草子』の評言から『松浦宮物語』を見てみるとき、この『松浦宮物語』が新たに求めた、物語としての地平はどこにあったということになるのか。ひとつは『万葉集』への傾斜である。そしてもうひとつが『宇津保物語』であり、『唐物語』・『浜松中納言物語』等からつながる世界。すなわち、唐の世界の取り込みであり、漢籍をより縦横に駆使することにより物語化に多様な局面を切り開こうとしたものであったといえる。このことは『唐物語』のような、中国の説話に直接その素材と内容を依拠したものを別にすれば、『松浦宮物語』が唐の人物名を豊富に用いてたものであることは明らかで、他の物語とはおおいに異なる点ともなったのである[7]。

二

それでは次に、『松浦宮物語』に示された一人の人物名から考える糸口を開いていくことにする。角川文庫（二〇）「伏兵の策」に

帝の軍の将軍名が列挙されているところを見てみよう。

先帝のたのみたまへりし大臣・大将軍も、この時、人にはかりうしなはれ、ぬす人にさしころされなどしつつ、かたへはうせにければ、后の御せうと大尉衛将軍鄧立成・司空済陰侯長孫慶・車騎将軍上柱国楊巨源・竜武大将軍独孤栄といふ四人をむねとして、うちむかはむとす。尚書左僕射王猷・左将軍陳玄英、御こしにつきて、心ざしばかりはおのおのおこなへど、したがふつは物いくばくにあらず。[8]

ここにあらわされる「車騎将軍上柱国楊巨源」に注目していこうと思うが、萩谷氏は「中国人名大辞典（商務印書館本）によると楊巨源（物語は揚）なる名の人が晩唐及び南宋に見えるが、後者は宋史巻四〇二列伝一六一に記載された人であって、迚も作者の認識には入るところではなく、前者とても、旧唐書・新唐書の何れにも記載のない有名ならざる人」[9]であるとしている。また、角川文庫の補注では、『白楽天詩集』巻十五の「楊秘書巨源に贈る」にあらわれている楊巨源を指摘するにとどまっている。しかし、この『白楽天詩集』に見える楊巨源の名は、「千載佳句」に十五首納められている人物であり、また『新撰朗詠集』上巻にも「鴈」の題で白楽天の「贈江客」の詩につづけて、「寓居」として楊巨源の次の詩をあげている。[10]

夢中郷信驚二秋鴈一。窓下林声帯二夜蟬一。

また、下巻の「松」の題でも

搖レ窓竹色留レ僧語。入レ院松声共レ鶴聞。[11]

楊巨源の名は日本において認識されていなかった名ではなく、中国の詩人として知られた人物名であったという方が妥当である。

あわせて、もう一つ楊巨源の名を見い出すことのできるものがある。

張生發二其書於所レ知。由レ是時人多聞レ之。所レ善楊巨源好屬レ詞。因為賦二崔娘詩一絶二云、

清潤潘郎玉不レ如　中庭蕙草雪銷初
風流才子多二春思一　腸断簫娘一紙書

これは、唐代伝奇の「鶯鶯伝」の一節である。[12]

楊巨源とは、唐の時代に実在した文人であり、この「鶯鶯伝」が元稹の自序であることを宋の王銍が述べている[13]のを信ずるとすれば、「鶯鶯伝」の張生は元稹自身であるとみられている。楊巨源はその友人的存在であり、白居易等と同時代の人物である。多分この物語の登場人物としては数少ない実在する人物名であろう。[14]

だが、「鶯鶯伝」等の唐代の伝奇類が日本へ書物として伝わったのを史実的に確認できるのは『太平広記』に所収されたものからである。ただ、この伝奇類の伝来については、すでにいくつかの指摘

がなされている。日本文学への「鶯鶯伝」受容について川口久雄氏は、

唐代伝奇小説のうち、当時わが国に舶載されていたといことが明らかに知られるものは遊仙窟一編だけであって、来ていたであろうと推定せられるものは任氏伝と長恨歌伝あたりにとどまる。しかし伝奇というものは文言小説ではあるが、伝統的な書籍の概念からはみだしたもの、なかでも市井の人情を主題としている前掲の諸伝奇は唐志類や日本見在書目にも著録されにくい性質のもの、従って舶載され愛読されていたにしても、官僚文人たちが正式の記録にのこしたりすることは当然憚かられたに違いない。元白に対する承和以来のわが詩人の傾倒ぶりから類推して、彼らのグループが作った「会真記」（「鶯々伝」とも。元稹作。）や「李娃伝」（白行簡作）が、白楽天の任氏行や長恨歌が愛好せられたように愛好せられなかったとは考えられないように思う。[15]

と述べられている。そして『太平広記』に所収された書物の形で『鶯鶯伝』が伝来する以前に、すでに小さな物語として入ってきていたのではないかとの指摘もなされている。この「鶯鶯伝」の影響関係については、早く田辺爵氏によって指摘され、[16]次いで、目加田さくを氏においても『伊勢物語』六九段とこの「鶯鶯伝」の「話柄の類似」が取り上げられている。そして「現在書目録にはみえていないが唐の代表的艶情類伝奇であるから或は留学生の口伝誦承があったのではあるまいか。[17]」と述べられているごとく、日本へ伝わっているという確証は得られないまでも、これの伝播は認められる方向にあるといってよいようである。

三

『太平御覧』（千巻）・『太平広記』（五百巻）の成立は宋の太宗の時であり、九七八年頃に李昉等によって編集された。そして日本への伝来時期について、資料的に確認できるのは、『太平御覧』の伝来が『山槐記』・『百練抄』の治承三年（一一七九年）十二月十六日条が記す平清盛が大宋国から贈られた摺本『太平御覧』三〇〇巻を東宮（後の安徳天皇）に献上した記事である。

また、ここで問題としている『鶯鶯伝』を収めた『太平広記』であるが、これの伝来を確認する記事は、鎌倉初期（一二三二年頃）の成立といわれる藤原孝範の『明文抄』仏道部に一箇所「釋迦生中國設教如周孔。周孔生西方設教如釋迦[18]」を引いて、そこに『太平広記』からであることが記されており、これがこの書の名が記載された初出のようである。このことから、『太平広記』が定家の没年（一二四一年）以前には伝わっていたことが確認できるのである。

次に『明文抄』を編んだ藤原孝範（一一五八年～一二三三年）と

藤原定家の関係についてみてみると、『明月記』天福元年（一二三三）八月十三日条に「此五六日之間、孝範朝臣入道帰泉云々」とあり、藤原定家（一一六二年～一二四一年）より八年前に他界しているが、ほぼ同世代の人物であることがわかる。[19]

そして、定家五十六歳の『明月記』建保五年（一二一七年）七月四日条に、文章博士であったこの藤原孝範が定家の住まいを訪ねた記事がある。

西時文章博士孝範朝臣来臨、周章出逢、全無指事云々、清談良久、秉燭之程帰、此次云、漢書之説、受故永範卿之説悉讀之云々、予云、六旬之遺老戴白髪、雖人嘲難遁、先年自書漢書、及二三十巻、其餘執未忘、今聞此事、雖少々有受申説之志、如何、待涼氣、急可遂其事由芳約訖、[20]

暗くなるまで清談し、話は漢書のことに及んだようである。定家が漢書二、三十巻を書き写した時の余執が忘れられず、是非とも講説を受けたいと申し入れたことが記されている。となると、『明文抄』を執筆したときに藤原孝範の許にあったであろう『太平広記』を、定家が目にしていてもおかしくない状況を想定することができる。定家は『太平広記』で「鶯鶯伝」を読むことが可能であったと言い得るかもしれない。少なくとも定家のすぐ間近に「鶯鶯伝」を収めていたであろう『太平広記』が存在したことは確認できる。[21]

四

『太平広記』について長くなりすぎたが、『松浦宮物語』の楊巨源の名を「鶯鶯伝」で確認し、あわせて定家時代より以前から伝わっていた可能性のあったとされる「鶯鶯伝」ではあるが、少なくとも『太平広記』に収載された「鶯鶯伝」は、定家の間近に存在したところまでは確認できた。ただこの二つの作品にはことのほか類似、対応する部分の多いことを次に指摘してみることにする。

『松浦宮物語』（一二）の「商山夜曲」の段で、華陽公主と弁の少将の最初の出会いの場面を見てみる。

夜中にもなりぬらむとみゆるほどに、おなじごとたかき楼のうへに、琴のこゑきこゆ。（中略）いひしにかはらずえもいはずめでたき玉の女、ただひとり琴をひきゐたり。みだるる心あるなとは、さばかりいひしかど、うち見るよりものおぼえず、そこらみつる舞ひめの花のかほも、ただつちのごとくになりぬ。

とある。次に「鶯鶯伝」で、女主人公の鶯鶯が夜一人琴を弾いているのを、男主人公である張生が聴く場面をあげてみよう。

異時獨夜操レ琴、愁弄悽惻。張竊聴レ之、求レ之、則終不二復鼓一矣。

鶯鶯は求めに応ぜず、琴を弾かなくなるという違いはあるが、夜に

琴を弾く女のイメージの重なりが双方の作品に認められる。（以下、対応が認められる部分のそれぞれに傍線を付す。）

次に（一六）「五鳳楼の契り」の段の華陽公主と弁の少将の別れの場面で

下裳のこしより水晶のたまのてにいる程なるをとりいでて、「つひにわが契りをわすれず、のたまふままの心ならば、このたまを身はなたずもちて、いみじき雨風のさわぎなみのしたなりとも、つひにおとしうしなはで、わが国にかへりたまへ。きけば、日本に泊瀬寺といひて、観音おはすなり。かの寺にこのたまをもてまゐりて、三七日その法をおこなひたまへ。…」

ここは「鶯鶯伝」における張成と鶯鶯の別れで、鶯鶯が玉環を形見として渡す場面を髣髴とさせる。それは、

玉環一枚、是兒嬰年所レ弄、寄充二君子下體所一レ佩。

これは「水晶のたま」ではなく、腰に付けた「玉の環」ではあるが、玉の形容を持つそれぞれが契りを忘れないための形見であることの共通性は指摘しておいてもよいであろう。また、この玉の環は後拾遺集・赤染衛門集などの歌に多く歌われていた法華経の「衣裏繋珠」の宝珠の玉[22]と内容的に重ね合わせて考えてもよいであろう。

以上の華陽公主との場面にも「鶯鶯伝」を漂わせた部分が見受けられるが、梅の里の女こと母后との恋の場面になると、もっと顕著な対応を認めることができる。それは、「鶯鶯伝」の張成と鶯鶯との最初の逢瀬の場面が重ね合わされた表現として認めることができる。

五

梅の里の女（実は母后）と弁の少将の出逢いと恋の場面においては、（一八）「梅里逍遥」の段に

はるかなるはやしのおくをたづねゆけば、わが国に篳篥とかや、なつかしきこゑとしも思ひならはざりし物にや、所からはにるものなくきこゆ。この国には簫とぞいふ。「むべこそむかしの女みこの、これを吹きて仙にのぼり給ひにけれ」と、あはれに涙とどめがたし。

とあるのは、萩谷氏がふれられているように、秦の穆公の女の弄玉と、その夫の簫史が共に高楼で簫を吹き、弄玉は鳳に乗り、簫史は龍に乗って昇天したという『列仙伝』の故事をふまえたものである。これは『唐物語』や『浜松中納言物語』等にも取り込まれているものであるが、「鶯鶯伝」にもこの弄玉と簫史にまつわる内容は直接組み込まれてある。[23]それは、河南の元稹も張成の作った會眞詩三十韻に和して詩を作った、と前置きして「鶯鶯伝」に記された次の詩文の中にある。

龍吹過二庭竹一　鸞歌拂二井桐一
（中略）
乗レ鶩還帰レ洛　吹レ簫亦上レ嵩
（中略）
素琴鳴二怨鶴一　清漢望二帰鴻一
海闊誠難レ渡　天高不レ易レ冲
行雲無二處所一　簫史在二楼中一

かかわるところに傍線を付したとおり、弄玉・簫史の故事を引いており、素材そのものが「鶯鶯伝」には盛り込まれているのである。

次に状況設定ならびに物語性の類似にかかわる部分をまとめてみることにする。

（二八）「梅里逍遥」

[A] 山のはいづる月の光、くれはつるままに、うき雲のこらず空はれて、さえゆく夜のさまに、物のあはれまさりて、

（二九）「千夜を一夜に」（最初の逢瀬）

「こゑをたづねて、月にさそはれつる」よしをいへど、[B] いらふることもなし（中略）かれはただそらゆく月の心地して、[C] この世のことだにおぼえざりしを、（中略）時のまのへだても、かなしかりぬべく思ひまどはるるに、[B] いくらのこと葉をつくせど、いらふることもなし。[D] ただ涙ばかりぞかたみにせきあへぬ。[E] 千夜を一夜にだにせむすべなき心地に、[F] 鳥のこゑもきこゆれど、かたみにうごくけしきもなし。おきてゆくべきかたもおぼえねば、かうて世はつくしつべきに、[G] かどにたてりし人ぞ、いといたくこはづくるなる。女もいみじう思ひみだれたるにや、そのかす気色もなし。[D] ただ涙にくれて、[B] いひいづること葉もなし。

[G] この女よりきて、「あかくなりぬべし。ひるは、いと便なき所に」など、いたういそがせば、おのが衣衣いける心地もせず。[H] 身には心もそはでおしいださるる程、いふはいろか也。ふかくあはれとおもへる気色は色にいづれど、さらにいふこともなし。この人にも、[I] 返す返す契りおきていづるも、[J] 空をあゆむ心ちして、なほいみじうあやしければ、……

（三〇）「鬼神変化」の最後の部分

……[K] 月もたちにけり。

（三一）「巫山湘浦」（二度目の逢瀬）

いふかいなくあかしてむとおもへばひまなきたまくらを、さまでいそぐ気しきもなし。[L] たをたをとなよびたる物から、ただいささかおもひあふる程もなく、かいけつやうにきえうせぬれば、さらにいはむかたもなし。かくれみののためしにやとまでさぐれど、あとかたもしられず、まことに[J] 夢よりもはかなきは、思ひやるかたもなし。[M] ぬぎすてたるひとへばかりぞ、いひしらぬにほひにきしめたる。[N]

（三五）「輾転反測」

又あきらめぬ夢ながらやこぎはなれなむと思ふに、ひきかへし、あらぬ涙ぞ色かはりぬべき。[M]とどめし袖のうつり香につけては、枕さだめむかたもなく、いかにねし夜のかなしさの、身をせむる心地すれば、

まどろまず[J]ねぬ夜にゆめの　みえしより　いとどおもひのさむる日ぞなき

（三六）「朝雲無迹」

「……よしいまは、みきとばかりもかけざらむや、いとひすてらるる道のなさけならむ」[N]

（四〇）「音無の滝」

時のまにうちしきるかねのこゑも、命をかぎる心ちして、いふかひなくをしきわかれに、思ひまどへるさまは、かたみにしのびがたけれど、あけゆくをばわりなくのみ、[F]

（四一）「牡丹の栞」

みじか夜のかねのおとは、なく一こゑよりも程なくまぎれぬれど、[F]

以下、「鶯鶯伝」との対比を傍線部で示してみる。

俄而紅娘捧二崔氏一而至。至則嬌羞融冶、力不レ能レ運二支體一。曩時端荘、不二復同一矣。[a]是夕、旬有八日也。斜月晶瑩、幽輝半牀。張生飄飄然、[c]且疑二神仙之徒一、不レ謂下従二人間一至上矣。[f]有レ頃寺鐘鳴、天将レ暁。紅娘促レ去。[d]崔氏嬌啼宛轉。[h]紅娘又捧レ之而去。[b]終夕無二一言一。張成辨レ色而興、自疑曰、豈其夢邪。[j]及レ明覩、粧在レ臂、[m]香在レ衣、[d]涙光熒熒然、猶瑩二於茵席一而已。[k]是後又十餘日、杳不二復知一。張成賦二會眞詩三十韻一、未レ畢、而紅娘適至。因授一之、以貽二崔氏一。自レ是復容レ之、[i]朝隠而出、暮隠而入、同安二於曩所謂西廂一者、幾一月矣。（中略）張生俄以レ文調。[n]及レ期、又當二西去一。當レ去之夕、不三復自言二其情一、愁三歎於崔氏之側一。崔已陰知レ将レ訣矣、恭レ貌怡レ聲、

あわせて、内容的には重ねられてある詩の部分も指摘しておく。

無レ力慵レ移レ腕　多レ嬌愛レ斂レ躬[l]
汗流珠點點　髪乱緑葱葱
方喜千年會[e]　俄聞五夜窮[f]
留連時有レ恨[h]　繾綣意難レ終
慢臉含二愁態一　芳詞誓二素衷一[h]
贈レ環明二運合一　留レ結表二心同一
啼粉流二宵鏡一　残燈遠二暗蟲一
華光猶苒苒　旭日漸曈曈
乗レ鸞還帰レ洛　吹レ簫亦上レ嵩
衣香猶染レ麝[m]　枕膩尚残レ紅

アルファベットの大文字と小文字でそれぞれの対応を示してみた。

(A)では、時間設定と月の様子の類似がみられ、(B)では、女は一夜を言葉を発することなく過ごしたこと、(C)は、この出来事がこの世のものとは思われないことについて述べている。また、(c)に「神仙の徒」とあることは、『松浦宮物語』の梅の里の女（母后）が後に明かされる忉利天の生まれ変わりであることと考え合わせてみてもよいであろう。(D)は共に女がその夜は啼き尽くすばかりであったこと、(E)の「千夜を一夜に」は萩谷氏もその典拠を明確にできかねておられた部分であるが、(e)の「まさに喜ぶ千年の會」から導き出されていった言葉と考えてもよいのではないだろうか。そして、後に短い逢瀬を嘆く文脈が続くことも通有する。(F)は後朝の別れの鐘の音の共通性を出してみたが、『松浦宮物語』では最初(F')「鳥のこゑ」であったが、後になって二箇所に渡り(F)「鐘のこゑ」「鐘の音」に転換され同じ趣向になっている。(G)の側付きの女の存在と、そしてその女が明け方に帰りを促すことの共通もある。(H)の内容は、(h)で鶯がお側付きの女である紅娘にしどけなくもたれかかって帰る様子に通ずるし、(I)の後の逢瀬の約束も、重なる逢瀬へと続くのであるが、(i)ではその逢瀬の様が描かれている。(J)の「空あゆむ心ち」「夢よりもはかなき」は、(j)で張生が「豈にそれ夢ならんかと」思うことに通ずる。(K)では、二度目の逢瀬まで一ヶ月を経過したことになっているのに対し、(k)では十日の間をおいてのこととなっている。時間の差はあるが、共に期間を空けての二度目の逢瀬となっているのである。(L)の梅の里の女の「たをたをとなよびたる」風情は、(ℓ)で紅娘にしなだれかかりながらある様と似通う。(M)は衣に焚き染められてあった香である。同様のことが(m)にもみられ、詩の部分ではそれは麝香の香であるとしている。(N)は離別の時の様子である。同じく別離は(n)においても確認できる。(n)の傍線部は一度戻ってからの二度目の別離部分であるが、その少し前にあった一度目の別離に「崔氏宛無二難詞一。然而愁怨之容動レ人矣。」と、こちらは恨み言は言わなかったこととしている。

六

物語状況の設定とそこでのそれぞれの対応が、いかに似通っているかの確認はできたと思う。「鶯鶯伝」と『松浦宮物語』の連関性は以上みてきたところで、ほぼ明らかになったといえよう。

1、実在した人物「楊巨源」の名が双方の物語に埋め込まれてあること。

2、華陽公主と鶯鶯のどちらもが琴を弾く存在であること。そして、別れに際し、ともに玉を形見として女が贈ること。

3、『列仙伝』の弄玉・簫史の故事がともに触れられていることの共通性。

4、弁の少将と梅の里の女（母后）との逢瀬の場面が、鶯鶯と張生との逢瀬の場面に類似した物語状況であること。

また、『松浦宮物語』では、その登場人物のほとんどが物語が展開されていった後になって、その名が示されるという構造になっていることも留意しておいてもよいであろう。主人公である弁の少将の「氏忠」にしても、老翁の「陶紅英」、また先帝の名「文皇帝」にしても然りである。これらの点は「鶯鶯伝」においても鶯鶯の名が最後になって明かされる構造と共通性を感じさせる。

また、梅の里の女（母后）との逢瀬の場面について別の指摘もあることを触れておかねばならない。ここに述べてきた梅の里の女と弁の少将の逢瀬の場面について、萩谷朴氏は『太平広記』所収の「通幽記」からの逍旭の説話との対応を示唆しておられる。[24] こちらの方は「鶯鶯伝」に比べ、より神仙的な要素が色濃く出たものになっているのが特徴的である点で、見落とすことのできないものである。萩谷氏は角川文庫の注をはじめ各論文の中で詳細をきわめた典拠・影響関係を示唆しているが、物語作者はさまざまの作品から種々の事柄を摂取し、物語に反映させていることは了解されるべきことである。今ここでは、萩谷氏の提示された「通幽記」と並立させるべき、今一つのより濃厚な影響関係を感得できる事例として、『太平広記』所収の「鶯鶯伝」との関係を論じてみた。

注

① 市古貞次「中世物語の展開」「中世小説とその周辺」所収。

② 本文は新潮日本古典集成『無名草子』に拠る。

③ 『明月記』天福元年三月一八～二一日条、同年六月五・一八日条。また、『大日本史料』第五編之八、天福元年のところに所収されている『眞經寺文書』（ここでは『松浦物語』と表記されている）で尊性法親王がこれの作製に携わったことが見え、『古今著聞集』巻第一一・四〇三話には、そこで作製されたものを持ち寄った「絵づくの貝おほひの事」が記されている。この『松浦宮物語絵巻』については、岩橋小彌太氏「京都府史蹟勝地調査会報告・第四冊」（大正十二年）が最初に触れられ、後藤丹治氏「近古小説の二三について」（国語と国文学・昭和九年五月、後に『中世国文学研究』所収）や、寺本直彦氏『源氏物語受容史論考』、吉田幸一氏『伏見院本松浦宮物語』にその論究がある。

④ 萩谷朴氏「松浦宮物語は定家の実験小説か」（国語と国文学・昭和四四年八月）

⑤ 菊池仁氏「物語作家としての藤原定家―松浦宮物語の位置づけ―」（國學院雑誌・昭和五六年二月）

⑥ 豊島秀範「『松浦宮物語』の構造と『無名草子』の評言」（弘前学院大学国語国文学会『学会誌』6・昭和五五年三月、後に『物語史研究』平成六年五月所収）

⑦ 萩谷朴氏「松浦宮物語作者とその漢学的素養　上」（国語と国文学・昭和十六年八月）において、唐書列伝の目録等を用いて姓と名を組み合わせることで登場人物名を合成したのではないかとされている。

⑧ 本文は萩谷朴氏訳注、角川文庫『松浦宮物語』昭和五三年五月発行第四版。一部、私に改めたところがある。

⑨ 注⑦、萩谷論文。ただ、石田吉貞氏「松浦宮物語の作者は藤原定家

か」（国語と国文学・昭和十五年六月）においては、作中人物は多く仮作の人名であるが、楊巨源は実在の人物であるとの指摘はなされてある。

⑩ 「千載佳句」には楊巨源の名で納められているものは十八首であるが、金子彦二郎氏『増補平安時代文学と白氏文集　句題和歌・千載佳句研究編』で、秋興部・暮秋部・別意部の楊巨源のものは劉長卿の作として全唐詩にあることから十五首を楊巨源のものとしている。

⑪ 『群書類従』第一九所収に拠る。

⑫ 「鶯鶯伝」は明治書院刊『唐代伝奇』所収に拠る。

⑬ 『唐代叢書』付説。また『唐代叢書』などにおいては「鶯鶯伝」は「会真記」とも呼ばれている。

⑭ 注六、萩谷論文が他に「文皇帝」・「燕王」・「郭皇后」・「金日磾」等が中国の文献から直接その名を見い出せるとの指摘がある。「金日磾」については『明月記』建保元年五月十九日条にも「只思二後学一、有二楊子雲之才一、有二金日磾之忠一」と故事を引いている。

⑮ 『平安朝日本漢文学史の研究　中』

⑯ 「伊勢竹取に於ける伝奇小説の影響」（國學院雑誌・第四〇巻一二号、昭和九年一二月）

⑰ 『物語作家圏の研究』。他に上野理「伊勢物語『狩り使い』考」（国文学研究・第四一集、昭和四四年一二月）、同氏「伊勢物語と海波の文学」（国文学・昭和五四年一月）、また平成五年八月の中古文学会では今井源衛氏に「帚木巻頭と『好色賦』・『鶯々伝』」の発表があった。

⑱ 続群書類従三〇下所収。また、『群書解題』ならびに遠藤光正氏『類書の伝来と明文抄の研究』・『明文抄の研究並びに語彙索引』では『明文抄』の成立を一一三二年か、とするのに今は拠る。ちなみに『太平御覧』は『明文抄』の中で九箇所にわたって用いられている。

⑲ 『明月記』の中に藤原孝範の名は十九箇所にわたって見い出せる。

⑳ 『明月記』国書刊行会刊　昭和四四年刊

㉑ 池田利夫氏「見ぬ唐土の夢『松浦宮物語』を中心に」（国文学・昭和五六年一二月）の中で定家の漢籍関係について「明月記に見える漢籍の書名は二十五部ほどで多くはなく、和書の百二十余部、仏書の四十数部に比較して少ない。（略）すなわち経書では尚書、左伝、孝経の三部、史書が漢書のみ、他は貞観政要と文集・文選、それに幼学書の蒙求・李嶠百詠である。（略）逆に松浦物語に語られる群書治要の名は、明月記には見えない。」との指摘がなされてある。

㉒ 萩谷朴氏「角川文庫」注参照。

㉓ ちなみにこの話は『太平広記』「神仙四」にも収められている。

㉔ 注④に同じ。